高円寺純情商店街

ねじめ正一

新潮文庫

高円寺純情商店街

新潮文庫　ね－1－1

平成四年四月二十五日　発行

著者　ねじめ正一

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（〇三）三二六六－五一一一
編集部（〇三）三二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Shoichi Nejime 1989　Printed in Japan

ISBN4-10-102112-0 C0193

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮文庫

浅草寺秘情商店街

ねじめ正一著

新潮社版

目次

天狗熱……九
六月の蠅取紙……四五
もりちゃんのプレハブ……八一
にぼしと口紅……一三
富士山の汗……一六七
真冬の金魚……一九五
あとがき……二三〇
高円寺純情商店会　加盟店名簿（抜粋）……二三三
解説　秋山駿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

高円寺純情商店街地図

←石神井
早稲田通り
高田馬場→
ここから
庚申通り商店街
池尻クリーニング
中西菓子店
鈴木パン
生蕎麦増田屋
八百源
堀越自転車店
前川不動産
長谷部米穀店
福岡テーラー
昭和堂書店
パチンコ大王
吉本眼鏡店
中華・新来軒
戸越シューズ
新宿中村屋
柿沼カバン店
日の出陶器
平田運動具店
不二屋
大和田果実店
沢崎食料店
松崎眼鏡店
龍生堂薬局
光雲堂仏具店
安西洋装店
新川金物店
寿司清
石川呉服店
モンブラン洋装店
中川履物店
甘味喫茶久乃家
鮮魚・魚政
江州屋乾物店
空き店
山田惣菜店
横川洋品店
信州屋味噌店
八百高
モンナ毛糸店
有田おもちゃ店
バンビーナ洋品店
米川花店
三菱銀行
仲通り商店街
北　口
←立川
中央線高円寺
新宿→

高円寺純情商店街

天(てん)狗(ぐ)熱(ねつ)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

1

江州屋乾物店の一日は、かつを節削りから始まる。

朝六時、裏口の土間を開けると、母親が問屋の大箱の中から磨いてない汚れたままのかつを節を流しに積み上げていく。それを金だらいに浸け、カビやほこりをタワシで落とすまでが母親の役目だ。

かつを節がきれいになったところで、それを三段重ねの金のせいろに入れてふかし、やわらかくするのだが、これは江州屋乾物店の創業以来、ばあさんの役目と決まっている。ふかしが足りないと芯が固くてきれいに削れず、反対にふかしすぎるとかつをの旨味が抜けて味が落ちる。「江州屋の削りがつを」が中央線沿線界隈でなかなかの評判なのは、時間にすれば三、四十分のこのふかし具合によるのである。かつをふかし三十年のキャリアを持つばあさんはさすがに見事なもので、洗い上がったかつを節の顔つきとその日の天気にぴたりと合うふかし時間を割り出し、小まめに火加減を調節しては絶妙のタイミングでかつを節をふかし上げた。

ちょうどその按配、時間にすれば母親がかつを節を磨きはじめてからたっぷり一時間はたった七時ごろになって、やっと父親が土間に顔を出す。ふかしてやわらかくなったかつを節を、かつを節削り機にかけて削るためである。土間のまん中に置いてあるかつを節削り機は道具というより機械といった感じで、長年にわたってかつを節の脂を吸い込んでピカピカに黒光りしている。二日酔いで朝はいつも不機嫌な父親は「おはよう」も言わずに削り機に近寄ると、機械のふたを開けてまず十二枚の歯を点検する。前の日に削ったあとていねいに研いではめ込んでおくのだが、削る前にもう一度よく調べるのである。なるべく薄く、均等に、ふわふわに削るためには、この十二枚の歯の揃い具合が大切で、しかもその日その日のかつを節の質に合わせて歯の角度や出方を微妙に変える必要がある。

点検を終え、ふたを閉めて三馬力のモーターのスイッチを入れると、箱の中でキィーンと十二枚の歯がうなりをあげて回り出す。そこへ父親が、ほどよく冷めたかつを節を一本一本入れて削っていくのだ。機械のてっぺんにあいた穴へ左手でかつを節を差し込み、右手で鉄のレバーを手前にひっぱるたびに、父親のからだからぷんと酒のにおいが立つ。力を入れると毛穴からきのうの酒が浸み出てくるのだとばあさんが正一に言ったことがあるが、ほんとうにそうなのだろうと正一は思った。

穴の中のかつを節が十二枚の歯に削られてふわふわになって、カンナ屑のようにふわふわになった花かつをがつぎからつぎへふわふわ落ちて父親の足もとの受け箱にふわふわどんど

んたまっていくのを見ているのはおもしろい。こうやって一時間ほど削っていると、十二枚の歯にかつをの脂がへばりつき、ツルツルツルと削れていた音がシュルシュルシュルときしんで、切れ味が悪くなってくる。それを補うのに、父親は腰に力を入れて力いっぱいレバーを手前に引き寄せる。そうなってくるとここからが本当にかつを節を削るコツである。右手でレバーをしっかり握って手前にぐいっと引き寄せることによって十二枚の歯にいろいろと圧力をかけ、切れ味を工夫するのだ。

手前に引き寄せるあまり赤っぽいきつね色した花かつをが受け箱にふわふわもせずに落ちてくるようではダメだから、腕ずもうのような格好でレバーを弱めたり強めたりする、その弱めるところがえらく腰にひびいて加減がむずかしい。こうなると力仕事である。父親は額に汗を浮かべて真剣な顔をして、ぐいっ、ぐいっとレバーを引っぱる。力を入れすぎると、こんどは三馬力のモーターに負担がかかってウウウゥと唸って途中で止まってしまうこともある。止まるだけなら少し休めればまた動き出すが、モーターが熱くなりすぎると機械が故障して花かつをが作れなくなってしまう。商売ぎらいな父親も、このときばかりは真剣にならざるを得ないのである。

こうやってできた、江州屋自慢の薄く向こうがすけて見える花かつををふるいにかけてこれまた江州屋自慢の粉かつををつくるのは、正一の仕事である。

これまたかつをの脂がたっぷり浸み込んだふるいは、底に張った太い金網の一本一本も木

枠もすっかり黒ずんであぶら光りし、枠に墨で書かれた、

江州屋　昭和廿四年十二月四日

の文字が読みづらいほどの年代物で、このふるいを鍋に入れぐつぐつ煮込んでも味噌汁のだしくらいは取れそうである。

そのふるいに、削り機の受け箱にたまったふわふわの花かつををわしづかみして入れ、右手の指を広げてサッサッサッサッとこすっていく。ちょうどシャンプーで頭を洗う要領で、手の平を使わずに手首の力をゆるめ、指先だけでサッサッサッサッとやるのがコツだ。

サッサッサッサッと、指の腹でこする手応えを確かめながら、退屈しないように円を描いてサッサッサッサッとこすったり、斜めにサッサッサッサッとこすったり、タテ横にサッサッサッサッとこすっているうちに、かつをの脂が指先にもくっついてきて、こするたびに指先が脂ですべりがよくなり、つやつや光りだし、それでもサッサッサッサッとこすっていると指紋がなくなってしまうのではないかと思えるほど指先がつるつるぴかぴかになってきて、サッサッサッサッとこするふるいの金網のざらざらが指先に心地よくなってくる。正一は小学校四年のときから、このふるいで粉かつををこしらえているのである。

父親がじょうずに削ったふわふわの花かつをは、大人になりきっていない正一の指の力でもこすりやすい。できあがった粉かつをもさらさらときめが細かく、いかにも粉という感じ

である。

二年ほど前、父親が削り機のレバーに力を入れすぎて機械を故障させてしまい、修理が終わるまで一週間ほどよその店でつくった花かつをを仕入れたことがある。仕入れた花かつをは江州屋の透けるように薄いふわふわの花かつをとちがってぶ厚く、正一が一所懸命ふるいでこすってもいつものように指先がすべらず、ぱらぱらと下に落ちる粉かつをもつぶが揃ってなくて見てくれが悪いのだ。おまけにこすっているときにかつを節のかけらが正一の指先に刺さってたいへんな目にあった。

切れない歯で削った花かつをにときどき混じっているかつを節のかけらはするどくて固く、ゆっくりていねいに抜かないと途中で折れて肉に残ってしまう。こうなると爪や毛抜きではどうしようもなく、医者に行って取ってもらわなければならないのである。

こうして三十分ほどもふるいをかきまわし、店で売る一日分の粉かつをを作ってから、正一は学校へ行く。もう何年も、小学校のころから正一はそうやって学校へ行く。小学校の六年生くらいまでは、そうやって店を手伝うということがあたりまえだと思い、いや、あたりまえだなどと考えることもなく歯を磨いたり飯を食ったりするのと同じように粉かつをを作っていたのに、カラダがだんだん大きくなってくるにつれて、正一は自分にとってはあたりまえだった店の手つだいが、あたりまえではないという気になってくるのだった。その気持ちは、はじめはたしかに「大人と同じことをしている」という誇らしさだったのだが、身長

が母親を追い越した中学校一年のころからは何か別の、もっとどうしようもないような、やりきれないような気持ちに変わってしまった。

正一がやりたくないと言えば、そしてそれに何か理由がくっついていれば、正一は粉かつをづくりをやらなくてすむはずである。その理由はたとえば野球部の早朝練習があるからとか、ストーブ当番になったとかの程度でよい。そう言って学校に行ってしまえば、粉かつをづくりはばあさんか母親の仕事になる。たかが三十分、子どもにもできる仕事なぞさして苦にもせず、ばあさんか母親はやすやすとこなしてしまうにちがいなかった。

しかし正一は、やりたくないとは言えない。どうしても言えない。その、言えないということが、「乾物屋の伜」というものなのだと、正一はうすぼんやりと感じていた。

2

土間のすぐ向かいにある離れでばあさんといっしょに寝起きしている正一がふとんから出るのは、毎朝かつを節をふかす蒸気が土間から流れだす頃合いである。

イノシン酸をたっぷり含んだ蒸気が、ばあさんの起きたあともまだうつらうつらと寝ぎたなくふとんにしがみついている正一の枕元に漂い始めるとそれが目覚しがわり、かつを節を削る父親が現われるまでに着替えをすませて土間に行っていないと大変なことになる。夏は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton